

## 敗戦と世直し\*

### — 璽宇の千年王国思想と運動 — (2)

対 馬 路 人\*\*

#### 運動の展開過程 (承前)

##### 3. 第Ⅲ期

昭和23, 4年を境に、璽宇はほとんど社会的に取り上げられることがなくなり、いつのまにか、いわば「忘れられた教団」となってゆく。金沢事件であれほど騒がれたのが嘘のような扱われ方である。全く取り上げられなくなったというわけではないが、何年かに一度、忘れた頃に「あの璽宇は今どうしているか」といった記事が週刊誌に掲載される程度の扱いとなったのである。

その理由の一つは、マス・メディアや社会の側の関心の低下の求められよう。この時期以降、マス・メディアにとって広範な社会的関心を喚起するという点で、璽宇はそれまでもっていたニュース・バリューを失ったとみなされたのである。

そもそも璽宇は多くの民衆を組織した大衆運動ではなかったし、またそれを目指した運動でもなかった。既に述べたように、第Ⅱ期璽宇は空襲で焼け出された少数の信者たちの共同生活体として出発し、終始それを中心とした運動形態をとった。その外部に同調者はいたが、それらを含めてもその運動の量的規模は極めて小さかった。にもかかわらず大きな社会的関心を喚起したのは、宮家やマッカーサー元帥に直接訴えかけるような行動の大胆さと、そして何とんでもそこに当時の国民的英雄ともいえる双葉山や呉清源が参加したことに依っていた。片や少し前に引退したとはいえ不世出の大横綱と称えられた人物であり、片や当時無敵といわれた天才棋士であった。この二人の国民的英雄が璽宇に参加したとあれば、メディ

アがそれを大きく報じない訳はないのである。ところが璽宇は金沢事件で双葉山を失い、また、後述するように昭和23年には呉清源もそこを離脱する。こうして璽宇は金沢事件後、ニュース・バリューをもった二人の人物を相次いで失うのである<sup>1)</sup>。

璽宇が社会的に取り上げられる機会が減っていった要因として、さらに璽宇自身の側における運動のあり方の内部的变化にも言及する必要がある。金沢事件以前の第Ⅱ期璽宇は世直しの切迫感に促されて、マッカーサー元帥への二度にわたる直訴に典型的にみられるように、その世直しに「天責」あると考えられた天皇家、宮家、社会的ないし政治的指導者、著名人に対し極めて積極的かつ直接的にその世直しに参加するようアプローチした。また、金沢での祈りながらの街頭行進など、いやがおうでも人の目を引く対外的行動をしばしばおこなった。要するに璽宇のこの時期の運動はきわめて対社会的インパクトの強い行動形態を含むものであったということである。

それに対し、第Ⅲ期の璽宇では、少なくともその対社会的行動においては全体的にみてかなり控え目なものになっていった。とはいえ世直しの理念が見失われたというわけではない。世直しの責務を担うと期待された外部の「天責者」や「地責者」への働きかけの試みもさまざまな仕方で続けられた。その結果、活弁家で有名な徳川夢声や、平凡社の創業者で、世界連邦運動の主導者だった下中弥三郎など、幾人かの著名人が璽宇の支持者、後援者となった。しかしその対社会的アプローチはより穏健なものに終始するようになったのである。

\*キーワード：宗教運動、千年王国主義、宗教と社会統制

\*\*関西学院大学社会学部教授

1) ただし、この二人の璽宇離脱に関しては、朝日新聞や読売新聞といった報道メディア自身が深く関わっていた。

このように外部に向けての世直しの活動が控え目になると対照的に、璽宇の世直しの活動の方向はむしろその内部に向かうようになってゆく。つまり、世直しの追求にあたって、まず璽宇内部の者、あるいはかつて璽宇にあって活動した者の改心や懺悔が重視されるようになるのである。この時期以降、璽宇内部でメンバーによりしばしば懺悔や告白が行なわれるようになり、また、璽宇から社会に向けて発せられたメッセージも懺悔録、告白記が中心となった。内省化とでも言うべき運動のあり方のこうした変化は、単になりゆきによるものではない。それは金沢事件以降、璽宇が四面楚歌の苦境のなかで、世界観、世直し観、そして運動の再構築を模索するなかで生じてきた変化であったと考えられる。

では、どのような模索のなかからこうした変化は生まれてきたのであろうか。以下では、金沢事件ショックとそれに続く漂流状態のなかで、璽宇がいかに関運動を立て直そうとしたか、昭和22—24年頃のやや混沌とした過渡期の時期に焦点を合わせて、その動きを追ってみたい。

#### [側近たちによる「魔賊」の告白]

既に見たように、金沢事件によって「精神異常者」に率いられた「邪教」のレッテルを貼られたことにより、璽宇に対する世間の風当たりは以前に増して強くなり、事件後、璽宇は追い立てられるように各地を転々と移転する事態に追い込まれた。

一行は金沢事件の後もしばらく金沢に滞在していたが、転居後の滞在先がGHQによる接収の対象となっており、明け渡しの期限とともに、追い立てを受けることとなった。結局一行は「御遷宮」先の決まらないまま、5月末に帰京せざるをえなくなった。そこで巫女役の側近の神示により御殿場の秩父宮邸を滞在先に選ぶが、「いざ行ってみると果たして門前払い、そして警官や野次馬の包围を受け」[山本1960; 18] 野宿せざるを得なくなる(御殿場事件)。その後しばらく山中湖畔の呉清源の知人の別荘を滞在先とするが、そこも年末に立ち退かざるをえなくなった。そこで昭和22年の大晦日には璽光尊一行は沼津御用邸を「御遷宮」の地と決め、そこを訪れた。しかしそこでも

開門を拒否され、再び野宿を余儀なくされるのである。「みぞれ降る中を元旦にかけて警察や野次馬の前に璽光尊様をさらし者」[同上; 29]にしてしまうことになった。

その後一行は、昭和23年の初めから造り酒屋を経営する八戸の信者のもとに身を寄せるが、ここでは、乱闘事件、警察による強制捜査、地域の商店による不売運動など、つぎつぎと周囲との衝突に見舞われた。乱闘事件は、新たに住居を購入して璽宇に提供した信者が、璽宇のもとに入り浸りになったため、関係者たちがそれを奪還する目的で「璽宮」に乱入し、実力行使に及んだものであった。警察による捜索は信者による恐喝と短刀不法所持の容疑であった。捜索はいずれも空振りであったが、そのかわり精米が貯蔵されていたので、いやがらせのように食料管理法違反の容疑で取り調べがなされた。さらに周囲の住民の璽宇に対する態度も厳しく、「まったく文字通りの火攻め水攻めで、近所の店舗は食料品などの御買上げを拒み、たまに売る店があっても法外の暴利をとる」[同上; 18] といった有り様であった。八戸での滞在は約半年間であったが、その間璽宇はこのように四面楚歌の状況に置かれ、璽光尊も「御遷座中一度も御入浴遊ばされない程に御苦難の日が続」[同上; 18] いたのだった。

こうした状況の続くなか、璽宇では次第に、世直しの神業が至るところでかくも妨害を受けるのは、実は「悪魔」の一団が璽宇の神業を憎んでそれを潰す活動に出ているためだという考え方が強まっていったようである。当時から側近の一人であった山本栄子の回想によると、金沢事件以降、霊的感応の状況において、しばしば「悪魔」の活動について言及されるようになっていったという。

和子(中原和子—引用者)は神巫として初めは神仏様の接霊を一人でやっていたのですが、金沢の例の騒動がすむ頃から、無形に又悪魔がいてそれはかようしかじかの事をするのだと言い始めました。そのいうところは璽光尊様が世直しのために、お降りになられたことを悪魔は憎んで抹殺するために、一つの秘密結社を作りこれらが挙つて璽光尊様を殺すために、瞬時の暇もなく狙ってい

るのだというのです。…(中略)…この一団は璽宇の壊滅を目的に生まれたもので、俗的の職業を持っていてもそれは世間をごまかすための方便で璽光尊様を抹殺するために一致団結、力強い組織を持ち、警察も報道機関も全部その秘密結社の会員だと脅かしたのです。[同上；16-18]

そしてこうした悪の勢力の跳梁は日々の具体的な生活場面においてもリアルに感じられていたようである。そのことは例えば次のようなエピソードから窺われる。璽宇では来訪者があると、璽宇内の側近の神巫がその魂に感応し、その本性を語り出す(とされる)霊的現象がしばしば見られた。そうした来訪の際の感応において、その人物が璽宇に好意的な者であったにもかかわらず、「私は〇〇の魂です。このたびこうしてお詣りに来ましたが実は璽光尊様を殺すために来たのです。それでこの林檎にも毒を塗って来ました」とか、「私は××です。私は璽宇を破壊するために出来た秘密結社員の一人です。この結社員の常習として男は他のどの女とも関係することになっています」などといった言葉が側近の口からたびたび出たという。[同上；19]

このように璽宇に対する世間の非難や圧力の集中砲火的な高まりとともに、内部では自分達はその世直しの神業を妨げる秘密の邪悪な勢力に組織的、計画的に圧迫されているというイメージが次第に膨らんでいったと考えられる。そして、先の『魔女の願い』からの引用からも窺えるように<sup>2)</sup>、警察や報道機関が璽宇にさまざまなかたちで圧迫や非難を加えるのは、そうした邪悪な勢力に動かされているためだと宗教的に解釈されていくのである。しかし璽宇はもっぱら警察や報道機関のような自分達の外部の組織による圧迫にのみ、自分達を攻撃する邪悪な力の介入を見いだしたというわけではなかった。むしろそれら邪悪な勢力の中心は、実は、璽宇自体の内部深く浸透しているとみなされたのである。

手にした文書のなかで、そうした考え方が窺われる一番古い文書資料は、呉清源「世直し碁」(『中

央公論』昭和23年10月号掲載)である。当時彼は囲碁の研究そっちのけで璽宇の活動に没頭していて、手元に棋書はおろか、碁盤・碁石もなかったにもかかわらず、囲碁の勝負ではことごとく対戦相手を退けていた。このエッセイで彼は自分の信仰遍歴を概観し、自分が負けない「不思議」の裏にはそこから得られた精神の修養や信仰の力があるとしている。そのなかで彼は璽宇に対する「鶴見の警察事件、多摩川、金沢、目黒佑天寺の警察事件」が「フリーメーソンの計画」によると述べるとともに、更に呉自身が「日本皇室の顛覆と大和民族の撲滅をはかったフリーメーソン(秘密結社)」の「特別会員」の一人で、妻の中原和子はその「超特別会員」だったともしている。[呉1948；37]そして「私は昭和18年の夏頃その目的たる光りの抹殺をねらってはじめて天照皇大神の化身であられる璽光尊の実態にうたれたのでありますが、間もなく一番中心だった中原和子がこの世直しの前にまず降伏し、協力者の私も兜を脱いだ」[同上；38]という。呉も妻の和子も第Ⅰ期璽宇時代からの中核信者であり、しかも第Ⅱ期璽宇では幹部ないし側近ともいえる存在であった。特に和子は神巫の中心として「神示」の取次ぎ役をほとんど一手に引き受けていた。こうした側近中の側近が実は璽宇の世直しを妨害する秘密の邪悪な組織の「一番中心」だったというのである。

こうした考えはこれが書かれた後あまり間を置かず、さらに和子自身の手によって、しかもより系統だったかたちで表現された。中原和子は昭和23年11月11日に、突然璽宇を出ていってしまうが、その約五ヶ月後、彼女の遺留の行李からザラ紙を綴じた一冊のノートが発見されたのである。そこには鉛筆で「まえがき」とだけ表題がつけられた手記(以下ではこの資料を中原和子「手記」と略記)が記されていた<sup>3)</sup>。そしてそこには、自分の本性が実は「魔賊の王」であり、璽光尊の世直しの神業を妨害するため、その本性を隠して璽宇に入り込み、様々な妨害活動を行ってきたが、結局璽光尊の慈悲と偉大な力を前に自らの非を悟り、懺悔するといった内容の文章が書き連ねて

2) ただしこの資料は昭和35年に璽宇から出版されたもので、その後の璽宇の考え方、すなわち自分(山本栄子)も含めた璽光尊の側近の神巫こそが実は魔賊の幹部であったという立場で書かれている。

3) 筆者が資料として利用したのは現物を書写したもので、分量は便箋10枚程である。

あった。

「まえがき」とあるからには、当然後に本文が続くことが予想される。実際、それは「では、これから私のなし来たった悪業と邪心の告白を以って、ざんげの一端となします」という、後続の本文を予定する文章で終わっている。その意味では、手記としては具体的説明を展開した本体部分を欠いた未完の断片とも言える。そしてこのように「ざんげ」を完成し終えぬまま璽宇を去ったということが、後に触れるように、璽宇のその後の世直しの解釈や運動にある影響を及ぼすことになる。ただしその中味を読んでも、いわば総論としては、これだけでもそれなりのまとまりがみられる。文章に日付がないため、いつ書かれたかは正確にはわからないが。しかし文章中に「三年半前、即ち昭和二十年五月」とあり、それから逆算すると、書かれたのは昭和23年の秋、和子が璽宇を出て行く少し前の時期だと推測される。

以下、原文の一部を紹介しよう。

私は魔賊の王者—女王でありました。…(中略)…魔賊の女王とは即ち悪の権化であり、世にありとあらゆる罪惡の基因をなす所の一切の悪性、魔性を中にひそめて、しかも見栄と自惚れと化けを以って、巧みに世を偽って、表は如何にも純情真面目をよそほひ、地下に悪の計画をなし、之を行って来たものであります。[中原；2枚目]

私は…(中略)…平々凡々の一女子の如くに装って、しかも此の魔賊の特別会員の、尚その上の、世にたった二名しかいない超特別会員の一人として、今日まで特別会員第一階級三十名、特別会員第二階級八十名の上に立ち、有形無形の秘密指令を地上地下に発して、璽の光抹殺、世直し抹殺、岩戸隠れ抹殺の為、ありとあらゆる計画の主体となってまいりましたのです。[同上；4枚目]

世に即ち邪教として狂者として世あらしの鬼の如くに忌み嫌われている所謂「璽光尊」様こそは邪教どころではない、実に万物万霊の大御親様、宇宙創造大霊の化身といふ、一寸想像のつかぬ程偉大な御光であるのです。世の者はこれを知りません。知らずして邪教なりと信じ、或は新聞ラジ

オの風評や、巷間の噂話を以て一概にこれ信じて食はず嫌いをして居ります。真相を知っているのは、唯魔賊特別会員あるのみであります。魔賊特別会員は実にこの世直しの救衆の御光りなるを知り乍ら此の抹殺をはかって今日まで之を世に知らしめざるが為に、あたかも迷信邪教の如くに思はせるが為にありとあらゆる計画をめぐらし、陰謀をおどらしたのであります。[同上；3枚目]

私は今より三年半前、即ち昭和二十年五月に遂に意を決して璽宇内陣に化け込んだのでした。以来…(中略)…殆ど御側近くに狙いつゞけ乍ら、その御慈悲と御力の如何ともなし難く、こゝに一切を以って無条件降伏を決しましたものです。この間どれ程の御慈悲を頂きましたことか、…(中略)…あらゆる罪業、悪因縁をお背負ひいたゞき、又照観世音菩薩様の御浄魂を日夜お恵み賜って、遂に今日までの自分のなして来たことが悪であり、自分が今日まで誇っていた魔賊の女王こそ最も卑劣極悪の姿であることを知ったのでした。…(中略)…しかもその私が三年半、絶対神璽光尊様の御側にあるを許されて、如何にその執念の満足を與えられ乍ら救はれて来たか、これこそ世直し、人心の改革、万霊救魂の高くも尊く、清くも又涙なくして拝されぬ神事であったのです。[同上；9-10枚目]

呉の「世直し碁」の記述と和子の「手記」の記述の間には、和子が「魔賊」として璽宇に入り込んだとされる時期や、璽光尊の前に兜を脱いだとされる時期など、細部においてやや食い違いが見られるが、中原和子など璽光尊の最側近として仕えた者が実は璽宇の世直しの神業を妨害しようとした勢力の中心であったという大筋の認識では共通している。では、こういった認識はいつ頃どのようにして璽宇のなかに生まれてきたのであろうか。

一貫して璽光尊の元で仕えた最高幹部の勝木徳次郎の証言によると、そうした内容の発言がでたのは、八戸滞在時代(昭和23年前半)のことであり、しかもまず中原和子自身の口から懺悔として語り出されたという。それは「自分は万魂を支配する「ユダヤの女王」或いは魔賊の親分であり、

神を抹殺するために出現した。決して忠義者ではない」といった主旨であったという。また山本栄子『魔女の願い』では、八戸に移る直前の昭和22年暮れの沼津御用邸の事件に触れて「大魔王はその頃和子自らの口を以ってユダヤの女王という虚飾の代名詞を用いていた」[山本1960; 29]と述べている。これらから判断すると、邪悪な力の中心が実は璽宇の内部に深く浸透しているという内容の発言も、最初に神巫の中原和子によって八戸時代の前後に自己告白としてなされていたとみることができる。

とはいえ、当時彼女のこうした発言は決して一貫したものではなかったという。別の日にはそのことを改めて否定するなど、その発言には少なからず揺れがみられたという（勝本証言）。このことは彼女自身が告白後も心の中に深い葛藤を抱えていたことを示しているといえよう。彼女はその後、昭和23年5月8日に璽宇を出て、「すげ笠片手にモンペばきで知人の家を懺悔してあるい<sup>4)</sup>たりしたという。そしてさらに同年11月11日に懺悔の告白の「手記」を書き掛けのまま残して、最終的に璽宇を離れる。出たり戻ったりの行動、書き掛けの告白を残しての出奔、なんらかの躊躇を感じさせるそうした行動も心の中の葛藤の表れとみなせるかもしれない。「世直し碁」の記述と「手記」の記述のあいだに食い違いがみられるのも、こうした流動的状況を反映していると思われる。

ところでこれらの資料、特に「手記」では、和子（ら）が自分が最初から邪悪な意図を自覚しながら、その本性を隠して、あえて璽光尊の救世の神業を妨害する目的をもって璽光尊に近づいたといった主旨の記述がなされている。しかしこうした記述は必ずしも文字どおり受け取る必要はないと思われる。というのは、他方で、璽宇のなかで璽光尊の偉大さや慈悲や代受苦に触れるなかで、やっと自分の悪や卑劣さを「知った」としているからである。初めから璽光尊を偉大な救世主と知りながら、しかも邪悪な意志をもってあえてその聖なる神業を妨害しようとしたものが、璽光尊の偉大さに打たれて初めて自分の邪悪さを悟るといえるのは少々奇妙である。自分が最初から「魔賊の王」との自覚をもって、あえて璽光尊の神業妨害

のために璽宇に入ったというより、それはむしろ璽宇に入って活動してから後に、自分が「魔賊の王」だという自責、反省が深まるとともに生まれてきた自己解釈、即ち自己履歴の事後的な（再）解釈として受け取るべきではないだろうか。回心や懺悔のような翻身（根本的自己変容）は過去の生活歴全体の再解釈を伴うものであり、そこでは「翻身に先立つすべての事柄はいまや翻身に通じるものとして理解され」、「現在と過去の双方を包摂する真理そのものに過去を調和させるべく努力」[バーガー、ルックマン1977; 269-70]がなされるのである。

この点に関しては、さらに和子と同じ璽光尊側近であった山本栄子の告白が参考になろう。彼女は昭和35年になって、自分が「魔賊中の大幹部、八岐の大蛇サロメ」であるとする懺悔の告白録『魔女の願い』を璽宇より刊行している。しかしそこには最初に璽宇に接した昭和21年2月時点では「まだ私がこんな恐ろしい魂の持ち主…(中略)…と知っていた訳ではありません」[山本1960; 8-9]と書かれている。また彼女へのインタビューの掲載されている別の資料では、彼女は自分が「魔賊の大幹部」であることは璽光尊に言われたからではなく、自分に付けられた「御守護神様」（一般的にいう良心）によって知らされたと断りつつ、金沢での騒ぎのあったとき「頑迷で鈍重な八岐の大蛇の私が、上位諸神仏様の御接霊（神や霊が人に感応すること—引用者）をいただき、下、万衆の靈魂もこの肉体にいらていただいで霊格の相違一切を解らせて頂きました。そして極悪最劣等の自分である事も自覚させて頂きました」[璽宇奉賛会1960]と述べている。これらを見る限り、彼女が「魔賊の大幹部」の本性をもっているとの自覚をはっきり持ったのも、少なくとも金沢事件以降に「接霊」などで自分の魂の汚れについての反省が深まっていったからであることがわかる。

さて、このように「魔賊」の勢力が璽宇の奥深く浸透しているというメッセージは中原和子の告白に始まると考えられるが、それは彼女だけにとどまっていた訳ではなかった。璽宇の幹部で彼女の身近にあった者がそれに触発されたように、相次いで自分が「大魔王」中原和子の配下に位置す

4) 中原和子「手記」の写しに付されている前文の二枚目より引用。

る「魔賊」の「大幹部」だと告白するようになるのである。彼女の夫であり当時璽宇の幹部であった呉清源は「世直し塾」にあるように、「魔賊」である「フリーメーソンの特別会員」だったと告白する。また、山本栄子は『魔女の願い』にみられるように、自ら「魔賊の大幹部」である「八岐の大蛇サロメ」と告白した。また長く璽光尊の側に仕えた西口雪子は、その上に立つ魔賊のナンバー2である「魔王」の「提婆」とされたのである。これら自分が「魔賊」の大立物だと告白した人物は、いずれも遅くとも第Ⅱ期の当初から璽宇に加わり、璽光尊とともに寝食を共にしながら各地を転々とし、しかも数々の外部からの「迫害」に共に耐えてきた側近中の側近、同志中の同志ともいえる人々である。外部から見ると、彼らはむしろ璽光尊に対する忠誠心の最も篤く、また自己犠牲の精神に最も富んだ人達に映る。いわば四面楚歌の状況のなか、献身的に、また必死に璽宇を支えたはずの彼らが次々と、実は自分達こそ璽光尊の世直しを妨害した張本人だと名乗りだすのである。これは一体どうしたことであろうか。

#### [告白を促した要因]

以下では、その背景について、璽光尊ないし璽宇の人間観とその影響、璽宇集団の運動の方向付けにかかわるシステムの特徴、金沢事件以降の「靈戦」におけるネガティブな情念の高揚といった要因から解釈を試みることにしたい。

璽光尊の人間観、特に現代人観は、一言で言えばたいへん悲観的である。彼女の人間観は既に璽光尊と呼ばれる以前の第Ⅰ期璽宇の時代に著された『真の人』の中で、ある程度まとまったかたちで展開されている。それによると、「人」にはその精神のあり方によって四つの階級があるとされている。一番下には、「日々を動物的本能のまにまに貪欲飽くことを知らない生活をつづけ、いささかも、進歩向上に努むることをしらない」「動物」段階の人がいる。そして「現在の世の中は、殆ど全部が、この分類の最下位に在る」という[長岡1943; 11]。その上には「せつせと学問もし、勤勉努力もするが、これは只に、自己を利する為の働きのみであって、他人の為には、一向に役立つことを為さないといふ、至って利己的な階級

である「人間」がいる。「然し、この人間ですら、殆ど動物ばかりの今の世の中では実に少ない」という[同上; 12]。これら「邪道」に対して、「正道」として「自己の向上に励むと共に、他の仕合せをも計る」「真の人」と、「もっぱら利他のみを誓願とし、衆生済度のために精進し、努力されるところの聖者」である「仁」とがあるという[同上; 12-3]。そして「現在の人類は…(中略)…思想は個人主義、自由主義、唯物主義となり、弱肉強食は当然のことと考えられ、享樂的欲望は限りなく助長し、唯ひたすら、物質のみを追う生活とはなり下がった」[同上; 13]という。

そもそも人間は「神仏の御慈悲によって、銘々の靈の向上、魂の錬成の為に人の姿をかりて、この世に出していただいた」[同上; 15]。しかし、そのことすら知らない者が多く、「この自己誤認が因となって、色々の罪、穢れが躰について来る」という。したがって「先ず自己反省によって「真の自己を知る」こと」「自己を批判し、自己を見直し、そして自己を錬成してゆくこと」[同上; 19-21]から始めねばならない。そしてその錬成の方法は「天子様に帰一し、奉仕し奉ることであり、私を捨てて忠誠をつくし、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る」「臣民の道」[同上; 22]を実践することだという。「真の人」となるべく、絶えざる、そして細心の自己反省と、天皇、国家、社会への「滅私」、「無我」の奉仕の大切さが強調されているのである。

このように長岡良子の時代から、彼女の現代人の精神状況に対する見方は大変厳しいものであることがわかる。しかも、そうした人間たちに対する要求にもなかなか厳しいものがある。真の人間となるためには、徹底した自己反省や自己放棄と、天皇(ただし璽光尊が天照皇大神の分霊とされてからは彼女がその対象となる)への無私の絶対的献身が要求されているからである。

そして、こうした人間認識は第Ⅱ期璽宇以降も、更にシビアになっていったようにみえる。それは、例えば勝木徳次郎が璽宇の世直し観についてまとめた「世直しに就いて」(手稿、便箋91枚、昭和27年6月、「未完」との付記あり)などから窺うことができる。

靈魂の悪、之は始めから悪であったのではなく、流転の中に段々悪の質量もふえたと言へるのです。そして今日は全部が悪魔と悪魔の友達になって仕舞ったのです。…(中略)…然し悪魔がそのままの形態を以ってこの地上に出たのでは悪魔自身又破滅して仕舞ひます。…(中略)…然しそれでは困った事になるので(天照皇大神が—引用者)お情けと又御力をここにお示し遊ばされ万魂に夫々御守護神をつけて下さったのであります。…(中略)…人間の本性は悪なのです。御守護神が一寸その綱をゆるめたら大変なことになる [勝木 1952 ; 30-31]

今日の人間の魂にはほとんど自主的な善の可能性が見いだされず、神によって与えられた守護神の働きによってかろうじて悪への転落を免れているに過ぎないという厳しい人間観である。ほとんど人間性悪説に近い見方といえよう。しかもここでは絶えずそうした自己の悪しき心の動きをしっかりと凝視し、反省することが要求される。こうした教えのもとでは、人は否応なしに自己の内部に生じる敵意や利己心や妬みや傲慢さといったよこしまな心に対し研ぎすまされた感覚を持つようになると考えられる。一般的に人はそうした自分の心の醜さを直視することをできるだけ避けようとしがちである。しかしこうした教えの内面化は、自分の内部に生じるそうしたネガティブな心の動きに対する感受性を高める働きをもつのである。したがってそうした教えを真面目に受け入れれば入れる程、普通以上に自己の「魔性」に気づかされる機会も増え、またその認識も深まっていくといえよう。こうした意味で璽宇の悲観的人間観は、そのメンバーに自己の「魔性」に対して否が応でもより敏感になるよう促したと思われる。

一方、璽宇のメンバーは璽光尊の「世直し」のいわば先兵として、あるいは中核として活躍すべき人材である。彼らはその意味で「世直し」の主体たる璽光尊に対して、誰にもまして「私」や「我」を捨てた絶対的忠誠、献身が要請されるべき人々である。璽光尊に近ければ近い程、より高いレベルで心が清浄でなければならないからである。彼らは少なくとも「動物」や「人間」のレベルのあり方にとどまっていることは許されない。当然「真

の人」のレベルに向上しなければならない存在である。こうして彼らには、一般的なレベルよりはるかに高いレベルで、魂の純粹さ、誠実さ、無垢さを要求されたといえよう。

このように璽宇の中核メンバーは、一方で自分の心の汚れに対してますます敏感になるように促されるとともに、他方で常に高いレベルの心の清浄さが求められるという、極めて緊張度の高い精神状況に置かれていたとみなすことができる。悪に対する内省の深化は、自ずから自己の心の邪悪さや汚れに思い当たる機会を増幅させる。そしてもしそうなったとき、それはその人により深刻な精神的打撃を与えることになるのである。なぜならその時その人は璽宇のメンバーとして要求される高い精神のレベルと現実の自分の間で、非常に大きな落差に直面するからである。

璽宇の側近たちが中原和子を先頭に次々と自ら「魔賊」の中核だと告白するに至った背景について考える場合、更に璽宇の運動を方向づけていった組織上のメカニズムについても押さえておく必要がある。第Ⅱ期の璽宇の組織についていうと、その権威の構造、リーダーシップの構造にはやや屈折した部分がある。もちろん璽光尊が世直しの主体と考えられており、しかもメンバー全ての帰依の中心対象であるという点では、権威やリーダーシップは極めて一元化されているともいえる。しかしだからといって、璽光尊が自ら陣頭に立って璽宇の運動のあり方や方向付けに関して直接命令指導をしていたわけではないのである。世直しを進めるために、璽宇は具体的にどう行動すべきかといった運動の方向づけについては、既にみたように、むしろ中原和子を中心とする神巫の「神示」に委ねていたといえる。そもそも長岡良子が「璽光尊」とされたのも、この神示によるものであり、以来、璽光尊自身も神示に対してむしろ「無私」の態度で受動的に振舞ったのである。したがって璽宇の運動を直接方向付けたという点では、璽光尊自身より神巫の下すメッセージが大きな影響を及ぼしたといえよう。

このように第Ⅱ期の璽宇はまさに神巫のもたらす神示のままに行動していったのである。しかしその結果は必ずしも芳しいものではなかった。世直しに向けて成果を挙げたとみられるものもあつ

たが、不首尾に終わったり、あるいは外部社会に  
 璽宇に対するネガティブなイメージを与える結果  
 に終わるケースも少なくなかったからである。その  
 頂点とも言えるのが金沢事件で、天変地異の予  
 言やそれに基づく宣教活動が警察の直接介入を誘  
 発した。しかもその過程で璽宇は、主としてマス  
 メディアを通して、「精神異常者」によって率い  
 られた「邪教」集団という決定的な負の烙印を押  
 されることになったのである。

このようにみると、この間の璽宇の運動のなか  
 では、あくまで結果から見ての話ではあるが、神  
 巫による「神示」が璽光尊及び璽宇を窮地に追い  
 込んだという見方も可能であろう。ただし神巫は  
 いわば霊媒であり、私意の無い精神状態のなかで  
 神を受け入れ、託宣を下すものとされている。そ  
 こに神巫の潜在意識がなんらかのかたちで投影さ  
 れることは考えられるにしても、少なくとも「神  
 示」は神巫の個人的意志を自覚的に表現したもの  
 ではない。神巫にとってもあくまでそれは神の意  
 志であるといえる。神巫にとってはたとえ自分  
 を通した「神示」であっても、それは受動的に受け  
 入れるものであった。その意味では、神巫の「神  
 示」が結果として璽宇を窮地に追い込んだとして  
 も、直ちに神巫がその責任を負うべきだといふこ  
 とにはないだろう。

しかし神巫の立場からすると、自分を通した「神  
 示」に基づく行動が、結果的にとはいえ、璽光尊  
 の権威を損ない、また璽宇を苦境に追いやったと  
 いう事実は重い心理的負担や葛藤をもたらしたで  
 であろう。そしてこうした心理的負担や葛藤が強い  
 自責感、罪悪感に転化しても、それは決して不思議  
 なことではないだろう。実際、「魔賊」としての  
 懺悔の告白の口火を切ったのは神巫役の中心で  
 あった中原和子であり、懺悔の手記『魔女の願い』  
 を著した山本栄子も神巫を務めた女性である。し  
 かもその手記における懺悔の内容を読むと、多くの  
 場合それは自分達が出した「神示」がかえって  
 璽光尊や璽宇を傷つけたケースに関わっているの  
 である。例えば、以下の如くである。

(自分達魔賊の一引用者) 一味は今度はいよいよ  
 頃合を計り、金沢へお宮を遷さねばならないよう  
 に仕向けた上、幹部が皆われもわれもと神様

ぶって天変地変の予言を始めたのです。それでこ  
 の魔賊の秘密指令を受けた警察は、得たりとばかり  
 に大がかりな検挙となったのでした。…(中略)  
 …これは魔賊のたくらんだ璽光尊様を邪教として  
 抹殺せんとする陰謀の一番大きな計画だったので  
 す。[山本1960；12-13]

更に、金沢で立ち退きを迫られた際には、

もうのっぴきならん状態になっているのに、私  
 はいかにも荘重な口ぶりで神霊が私の口を借りて  
 いわれるようなふりをして「私は弘法です。私の  
 法力によって明朝十一時まではあんな不浄役人を  
 よせつけません。どうぞ御安心ください」などと  
 和子と二人で、神様ぶっての進言です。ところが  
 実際には表の方ではもう大勢の警官や新聞の関係  
 者が一パイ押しよせ、…(中略)…大変な騒ぎなん  
 です。このようなことをして璽光尊様をお困りに  
 なるようにしたのです。[同上；14-5]

そうした状況のなか、遷宮先の決まらないまま  
 上京したが、

そうなくても尚も側近の和子や私が神様をか  
 たって、次のお宮は〇〇ですとか御本城は××で  
 すなどとでたらめな事をいい最後に「秩父宮邸が  
 御本城です。先方へかけ合ってお迎えさせますか  
 ら」などというのでした。…(中略)…いざ行って  
 みると果たして門前払い、そして警官や野次馬の  
 包囲を受け、又しても野宿をおさせいたしました。  
 これが忠勤者の仕わざです。あされるばかり  
 でしょう。[同上；15-6]

璽宇の組織において神巫はあくまで璽光尊及び  
 その世直しの神業を補佐する奉仕者である。しか  
 し、同時にそれは「神示」を通して事実上璽宇の  
 世直し運動の方向を決定的に左右する立場にあ  
 る。璽宇への無私の献身者であれという強い要請  
 を担いつつ、神意の伝達役として事実上璽宇全体  
 の行動決定を担うという大変複雑で微妙な立場と  
 いえる。そのため「神示」に基づく行動がなんら  
 かのトラブルを生じさせ、璽光尊や璽宇を傷つけ  
 た場合、そこに大きな精神的ストレスがかかるの

である。彼女らの「魔賊」の告白と懺悔は、璽宇組織において神巫が置かれた複雑で微妙な立場や、それに伴って生じるこうしたストレスと決して無縁では無いであろう。

神巫を中心とした璽光尊の側近たちが次々と自分達こそ世直しを妨害する「魔賊」の首領ないし中核幹部だと告白しだした背景として、もう一点、金沢滞在以降「靈戦」と呼ばれる降霊（璽宇では「接霊」と表現）儀礼がしばらく盛んに催されたことをあげることができよう。これは中原和子など神巫が中心となって、璽宇のメンバーに様々な霊格の神や霊を乗り移らせ、それに語らせるといふ会とされている。「靈戦」というからには、浄らかな神霊の降霊もあったが、一方霊格の低い不浄の霊の降霊が生じることも少なくはなかった。そして後者の場合には、璽光尊の前で璽宇メンバーが普段とても口に出せないような汚らわしい言葉を投げつけるといった光景が繰り返されたという。「金沢の事件以降は更に「靈戦」を以って地獄芝居を演じて、夜もなく昼もなく毎日毎夜全員総がかりで璽光尊様を脅迫し、嫌がらせを言って、本当の精神病患者にしてしまおうとしたのです。」[同上；16]

シャーマニズムの人類学的解釈の中で、社会的劣位者による憑依儀礼で生じる攻撃的トランス状態を彼らの上位者への不満やフラストレーションのはけ口ととらえる見方がある [ルイス1985]。社会的に劣位に置かれた者がトランス状態になることで、乗り移った霊の言葉として、普段は口にできない上位者に対するネガティブな意識や感情を公然と表出することが可能となるというのである。いずれにせよトランス状態は意識や感情に対する普段の自己抑制から人を解放する面がある。璽宇は世直しの神業を担う聖なる集団であるとされ、メンバーたちは無私の献身という厳しい要請を自らに課してきた。そこでは自らの内の潜むそれにそぐわない「邪悪な」意識や感情は極力、発現を抑えられてきたといえよう。そうしたなか「靈戦」の活発化によって、メンバーのあいだで降霊体験が積極的に奨励される事態が生じた。そしてそれは、少なくとも結果的には、日常的には抑えられてきた、あるいは自分でも気づかなかつた璽

宇や自己に対するネガティブな意識や感情の表出を促す機会を与えたと考えられる。

また、こうした降霊現象のなかでその人は自分の意識や身体が降りた霊によって支配されるという体験を持つ。そうした体験は自分が常によこしまな霊に操られる可能性があるのだという意識をその人にもたらすだろう。実際、山本栄子はこうした降霊を通して、「他動的な不思議な事をこの肉体に体験して神秘的な世界のある事を確信し」、さらに「上位は諸神諸仏のご接霊をいただき、下、万衆の靈魂もこの肉体をいれていただいで霊格の相違一切を解」とともに、「極悪最劣等の自分である事も自覚」するようになったという [璽宇奉賛会1960]。

このように「靈戦」における降霊現象の高揚を通して、璽宇や自己に対するネガティブな意識や感情が解放されるとともに、自分がそれを生じさせる悪しき霊に支配されることがあるという感覚を生々しくメンバーのあいだに定着させたといえよう。

神巫を中心とした璽光尊の側近たちが、金沢事件以降の璽宇運動の変転のなかで、中原和子を筆頭に次々と「魔賊」の首領や幹部と告白しだしたのはなぜか。とりあえず我々はその背景として、それを促すと考えられるこれら三つの構造的ないし状況的要因がそこで重なり合ったことを指摘しておきたい。

いずれにせよ、こうした側近たちの「魔賊」の告白は次第に璽宇全体の認識として受容されていった。呉清源「世直し碁」や中原和子の「手記」以降の璽宇関係の文書資料の中で、世直しについて触れた一番古いものは、おそらく勝木徳彦（徳次郎）名で昭和25年1月13日の出された横浜検察庁宛の書簡であると思われる。これは当時璽光尊が米の供出の拒否を扇動したとして、検察庁より呼出を受けた際、出頭しない理由を述べた返書として著されたものである<sup>5)</sup>。このなかですでに「璽光尊様は今日までこうした、大神様を抹殺せんとする悪魔の権化を先頭に世直しの癌の悪霊をしてお側に引き連れ給い神苑の尊厳を犯す事をお許し遊ばすという、御慈悲の限りをお恵み賜りました」[同上] と、いわば璽宇の公式見解として側近＝

5) この資料は璽宇奉賛会発行の「璽の光」（新聞）第一号に引用されている。

「魔賊」の中核という考え方を打ち出している。少なくともこの時期までには、こうした考え方は璽宇の中で確立されていたことがわかる。

では、どうして璽宇ではこうした「魔賊」の告白を受け入れたのであろうか。もちろん、その告白者たちが中原和子を初め、いずれも璽光尊の側近で、しかもそれらが自ら進んで次々そうした告白をおこなったということが、その大きな要因であることに違いはないだろう。身内の仲間が思い切って迫真の告白をしたのだから、それを信じるのは確かに当然のことかもしれない。しかしそれに加えて、こうした告白が周囲の激しいバッシングの中で深く傷ついていた当時の璽宇にとって、ある種の心理的癒しをもたらす要素を含んでいたという事も指摘しておきたい。

当時の璽宇は、救世主璽光尊を頂いて世直しの神業を企てたはずであるのに、なぜ周囲から強いバッシングを受けなければならないのかという深刻な神義論的疑問に直面していたと考えられる。告白は少なくともそれに対する一つの答を提供したのである。こうした告白を受け入れれば、璽宇や璽光尊が周囲からバッシングを強く受けたのは、側近たちが実は「魔賊」の首領や大幹部で、璽光尊や璽宇が周囲から「邪教」と思わせるように仕向けるような「神示」をあえて出していたからという風に説明されるからである。そしてこうした解釈をとれば、第Ⅱ期璽宇の運動には璽宇の、或いは璽光尊の本来の姿が示されてはいないことになる。そうすると「邪教」という周囲のレッテルは、実は、「魔賊」の策略に乗せられた誤解に基づくものだということになるだろう。従ってこうした解釈によって、第Ⅱ期璽宇の運動の挫折の理由が説明できるだけでなく、同時に救世主としての璽光尊の本来の姿や権威を守ることもできるのである。さらに、こうした事の真相を世間に明らかにし、その誤解を解けば、璽光尊並びに璽宇の名誉回復も期待できることになる。そうした意味で、側近による「魔賊」の告白を受け入れることは、当時の璽宇にとって、その傷ついた世直し観を癒し、更にそれを再構築する手がかりを与えるものであったといえよう。

[世直し観と運動の変容]

それでは、こうした告白の世直し観への取り込みによって、璽宇の世直し観やそれを追求する運動のあり方はどのような影響を受けたのであろうか。第Ⅱ期の璽宇では、一貫して世直しの時期の切迫が説かれてきた。そして璽光尊こそその世直しの主体であり、そのことをしっかり認識し、それに帰依することが救いへの道であり、世直しの成就につながるとアピールしてきた。なかでもアピールの対象として特に重視されてきたのは、天皇や皇族、マッカーサーのような政治指導者、双葉山のように大きな社会的影響力をもつ著名人であった。これらの人々は「天責者」などと呼ばれ、璽光尊による世直しを直接補佐する重要な任務をもつと考えられていた。したがって彼らにその「天責」をはっきり自覚させるよう働きかけることに、璽宇の運動のエネルギーの多くが注がれることになったのである。そしてこうした考え方は、誰が「天責者」にあたるかといった解釈における変動は除くと、基本的には第Ⅲ期璽宇にも引き継がれていったと考えられる。

第Ⅲ期璽宇の世直し観の特徴は、それが第Ⅱ期から根本的に変わったというより、むしろ第Ⅱ期の世直し観に新たな要素が付け加わり、それがやや複雑になったという風に捉えられよう。言うまでもなく付け加わったのは、実は璽光尊の世直しに真っ向から対抗する「魔賊」組織が璽宇内部に浸透していて、その神業を徹底的に妨害してきたという認識である。こうした認識が加わることで、璽宇の世界観、世直し観は、善悪二元的勢力の対立という二元論的性格を強めていったといえよう。

手元にある資料のなかで、第Ⅲ期の璽宇の教義や世直し観に就いて触れたもののうち、比較的時期の早いものとして、「璽光尊視察報告」（渡辺棟雄著、昭和25年10月）という謄写版刷りの冊子がある。これは当時文部省の事務官だった著者の渡辺が他省の事務官とともに、璽宇を視察した際の報告書（ただし、部外秘の特別調査資料とされている）で、璽光尊よりの聴取として、当時の璽宇の教義や世直し観、さらに日常生活について簡潔に紹介したものである。そこではそうした二元論的思考が比較的くつきり提示されている。

璽光尊に従えば、この現実は、与えられたそれとして、二元組織にできている。即ち一半は悪魔＝悪霊の世界で、その最下位を無間地獄と称する。この無間地獄に本拠をおく大魔王こそ…(中略)…中原和子としていまのわれわれの世界に化現してきているものであって、かの女はそうした立場から、現に全世界ことごとくをあげてその勢力下におこうと、その一切眷族をひきいて骨折りつつある〔渡辺1950-a；5-6〕

そしてそうした魔界の分霊がこの世へ仮の姿をとって現れた存在として、西口雪子(提婆の化現)、呉清源(金毛九尾の狐の化現)、山本栄子(八岐の大蛇の化現) などがあるという。

以上のような悪魔の世界に対して、さらに対照的な善の世界＝神仏の世界がある。その最頂…(中略)…絶対境は実に天照皇大神のましますところであって、いまの璽光尊はそうした天照皇大神が全身全霊そのまま人の姿に化現しましたところにほかならない〔同上；6〕

ここにも須左之男命と月読命の二柱の分霊があり、それぞれ勝木徳次郎、裕仁天皇がその化現だという。ただし後者については「御魂替え」の後、そうなる予定とされている。

そして両極端の世界の間に広義の「極楽世界」があり、さらにその下半分(狭義の「極楽世界」)が我々の住む世界だという。そこは、

もろもろの悪霊の化現と…(中略)…もろもろの神霊者の化現とが呉越同舟の形で住んでいる…(中略)…なおおなじところには、ほかにまだ計三十一人の神霊者あるいは天責者がやはりくだされていて、その第一人者が裕仁親王であり、さらにマ元帥もその一人だし、田中耕太郎、吉田茂も各そのうちである。〔同上；7〕

このように第Ⅲ期の璽宇では、この世界の実相について、絶対神の化現である璽光尊やそれを補佐すべき神霊の化現＝「天責者」のグループと、それに反抗する大魔王の化身やその分霊の化現たちのグループの対立の場と考えられたといえよ

う。宗教思想、とりわけ千年王国型のそれにおいて、こうした二元論的構図自体は決してめずらしい考え方とは言えないかもしれない。しかしその際の善悪の布置が一般的なケースと逆になっているという点で、璽宇はいささか特異である。こうした善悪二元対立の構図においては、一般的には、善なる力は救済主体の側に宿り、それが外部の悪の力と対決するという図式が描かれる。ところがここでは、善なる絶対神を補佐するとされるグループのほとんどがいまだに自己のそうした立場を自覚しておらず、現状では璽宇の外部に留まっているのに対して、悪の勢力の中心の方がかえって璽宇の内部に深く浸透している、あるいはしていたと捉えられているのである。そしてこうした世界像に基づき、世直しのプロセス、あるいは条件については次のように考えられている。

個人的にいえばまず個個人がこうした認識(一切を天照皇大神の化現である璽光尊に「奉還」すべきだという認識—引用者)をえることをもって、璽光尊のいわゆる「世直し」＝「岩戸びらき」ははじまる。同様にして全面的な「世直し」＝「岩戸びらき」は例の悪魔一切の執念＝欲が飽和状態に達したときにはじまる…(中略)…こうした目的のために、天照皇大神みずからが璽光尊としてしたしく顕現ましましているのみではなく、須佐之男命も勝木徳彦としてやはり人形をあらわしているし、ほかに三十一人の神霊者＝天責者がやはりこの世に送られておる。〔同上；11〕

現在は全面的世直しが切迫している時代ととらえられているので、それを成就するためには悪魔の働きを封ずることと、「天責者」にその自覚をもって璽光尊の世直しに参画してもらうことが必要である。この後者の活動、すなわち外部の「天責者」に「天責者」としての自覚を促す働きかけは、既にみたように、第Ⅱ期の璽宇の時代から一貫して重視されてきた。したがって第Ⅲ期の璽宇の運動では、それに加えて、そしてそれと同等の重みをもって、世直しを妨げる悪魔の跳梁に對しどう対処するかという課題が新たに課せられることになったのである。

なお、こうした悪魔への対処の課題に関して、

引用では「悪魔一切の執念=欲を飽和状態に達」するとある。これだけではやや意味がわかりにくいかもしれない。そこでこの点に関し別の文献をみると、「璽光尊様は…(中略)…悪霊をしてお側に引き連れ給い神苑の尊厳を犯す事をお許し遊ばすという御慈悲の限りをお恵み賜り…(中略)…そうする事によって悪霊邪霊の執念を満足させ、悪の根源を地上から断つ為に御許し遊ばされました」[璽宇奉賛会1960]とか、あるいは「大神様は一切を御照覧遊ばされ、この悪魔共の執念を満足させ(そうしなければ悪が止まらないので)て下さらうとして御自ら人のお姿をおとり遊ばされ、悪魔共を又人間に出して、側近近く引寄せて化ける事をお許し遊ばされた」[勝木1952; 90-91]などと説明されている。要するに、璽光尊は初めから悪魔と知りながら、あえてそれを自らの側に近づけることによって、しかもあえてその執念をすっかり満足させてやることによって、悪の力を無力化し、外の世界でのより破壊的な暴発を封じ込んだというのである。こうしてみると、自ら「魔賊」のリーダーだとする側近たちの懺悔の告白は、璽宇の世直し観に組み込まれるなかで、むしろ璽光尊のもつ偉大な慈愛と抱擁力と代受苦というより大きな救済の論理、もしくは物語のなかに包摂されていったとみることができるといえる。

こうした救済の論理からすると、世直しを進めるためには、「天責者」だけでなく、「魔賊」のリーダーたちもむしろ璽光尊のもとに引きつけておき、コントロールしておく必要があるということになる。魔賊たちは璽光尊に近づけば近づく程、またその世直しを妨害しようとする程、かえってその慈愛や抱擁力や代受苦の偉大さの前に兜を脱ぎ、やがて改心する。しかし、反対にそれらは璽光尊から離れると、むしろコントロールが困難となり、危険である。

実は、この点で問題となるのは、「魔賊の王」、「大魔王」とされた中原和子と、その夫で「魔賊」の幹部とされた呉清源である。既に述べたように和子は昭和23年11月11日、誰にも言わず一人で璽宇を出ていった。そこには書き掛けの懺悔の「手記」が残されていた。残された璽宇のメンバーにとって、それは懺悔の未完結を意味した。「魔賊の王」が懺悔を済ませないまま出奔してしまった

ことになる。そしてそれを追うように、12月には呉清源も璽宇を去った。こうして「魔賊」の大物が揃って璽宇を離れることになったのである。悪魔の跳梁を抑えるという新たな課題を負った第Ⅲ期の璽宇の世直し運動にとって、これは決して放置することのできない問題である。こうした背景のなかで、第Ⅲ期璽宇では、呉清源夫妻の帰還を促すことに特に世直し上重要な意義が与えられることになる。そして以後、璽宇は彼らに対する働きかけにかなりの力を注いでゆくようになるのである。

さらに、こうした世直し観の再構築に伴って生じた璽宇の歴史に対する再解釈が新たな動きを生んでゆく。既に見たように、金沢事件などの報道によって璽宇は「邪教」であるというイメージが社会のなかに広く定着してしまった。新たに運動を立て直すにしても、そこで一旦貼られた「邪教」というレッテルの負債は余りに重い。何としてもそうした汚名はそそいで、世直し運動の主体として名誉回復しておかねばならない。ところで、金沢事件などに対する側近たちの告白が真実だとすれば、それは全く新たな目で見直されることになる。それによれば、璽光尊は彼女を陥れるために「魔賊」が仕組んだ策謀によって、「精神異常者」とされてしまったことになる。したがって璽光尊に対する汚名はいわば「誤解」に基づくということになる。しかし、側近たちの告白は、璽宇のなかに留まっている限り、そうした世間の「誤解」を解消し、璽光尊の汚名を挽回することにはつながらない。そのためには、側近たちの懺悔の告白は是非とも世の中に訴える必要がある。こうして、第Ⅲ期の璽宇では、外部からの取材や自らの広報のさまざまな機会をとらえて、側近たちによる懺悔の告白に力を入れるようになってゆくのである。

このように、側近たちの「魔賊」の告白を組み込んで、世直し観を構築し直すなかで、世直しに向けての璽宇の運動はまた新たな方向に動き出していったのである。

(未完)

#### 引用文献及び参考文献

秋元波留夫 1971『異常と正常；精神医学の周辺』東

京大学出版会.

- 天野照子 1965-6 「再び披らく帥岡への道」(一)～(四)『無派』No. 46-49.
- 梅原正紀 1978 「璽宇—ある天皇主義者の悲劇—」梅原正紀他編『新宗教の世界』IV, 大蔵出版, 147-186.
- 大久保弘一(勝木徳次郎) 1967(?) 「天皇は楠木正成の再来である」(手稿).
- 勝木徳彦 1952 「世直しに就いて」(手稿).  
— 1969(?) 「璽宇と双葉との関係」(手稿).
- 上之郷利昭 1987 『教祖誕生』新潮社.
- 呉清源 1948 「世直し碁」『中央公論』昭和23年10月号, 35-38.  
— 1984 『以文会友』白水社
- 桜井一 1965 「璽光尊」下中彌三郎伝刊行会編『下中彌三郎事典』平凡社, 134-136
- 璽宇 1945-6 『御神示』(書写)全38冊
- 璽宇奉賛会 1960 「璽の光」第一号(新聞), 璽宇奉賛会.
- 対馬路人 1991 「敗戦と世直し—璽宇の千年王国思想と運動—(1)」『関西学院大学社会学部紀要』第63号, 337-371.
- 長岡良子(述) 1943 『真の人』.
- 中原和子 (1948) 「手記(まえがき)」(手稿).
- バーガー、P.L.、T. ルックマン 1977 (1966) 『日常生活の構成』山口節夫訳、新曜社.
- 村上重良 1985 『宗教の昭和史』三嶺書房.
- 山本栄子 1960 『魔女の願い』鈴木梅乃発行.
- ルイス、I.M. 1985 (1871) 『エクスタシーの人類学』平沼孝之訳、法政大学出版局.
- 渡辺棟雄 1950-a 「璽光尊視察報告」(特別調査資料一) 文部大臣宗務課.  
— 1950-b 『現代日本の宗教』大東出版社.
- (本稿の作成にあたっては、前回同様、勝木徳次郎氏をはじめ璽宇関係者より資料の閲覧、情報の提供など多大な便宜をこうむった。末尾ながら、関係者の方々にはそのことを感謝したい。)

## Japan's Defeat and the Millennium: Thought and Behavior of the Jiu Sect(2)

### ABSTRACT

Following the previous article in which the first and second stages of the Jiu movement were analyzed, this article deals with the third stage (after the Kanazawa incident).

After the Kanazawa incident, the Jiu group was stigmatized as “Jakyō” (evil cult) and persecuted by the police, mass media and society. In this difficult situation, the shamans and some central members of the Jiu began to confess that they were the leaders of the devil organization and had disturbed the millenarian movement of Jiu. The Jiu group accepted these confessions and tried to reconstruct their millenarian idea and to reorientate their movement.

In this article I consider the reason why they had confessed to be devils and point out the three related factors. The first is the strong pressure in the mind of members to keep their mind perfectly pure and to become sensitive to selfish concerns of their own. The second factor is the unique system of decision making in the Jiu group. Not the will of the messianic leader (“Jikōson”) but the message of the gods (“Gosinji”) which could be transmitted through the shamans (“Miko”) substantially decided the direction of the movement. So the shamans were urged to feel guilty about the failure of the movement. The third factor is the spiritual excitement in the Jiu group after the Kanazawa incident. The possession of the members by devil spirits occurred frequently there.

By accepting these confessions, the Jiu group tended to think of the world more dualistically and to strengthen the activity to control the evil power. As a result, the Jiu group changed their movement gradually in a more introspective direction.

**key words:** religious movement, millennialism, religion and social control